



**HATANODAI CAMPUS**  
旗の台キャンパス

医学研究科 歯学研究科 薬学研究科



**SENZOKU CAMPUS**  
洗足キャンパス

歯学研究科



**YOKOHAMA CAMPUS**  
横浜キャンパス

保健医療学研究科



**SAGINUMA CAMPUS**  
鷺沼キャンパス

医学研究科 歯学研究科 薬学研究科 保健医療学研究科

2027年4月開設予定

# SHOWA MEDICAL UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL

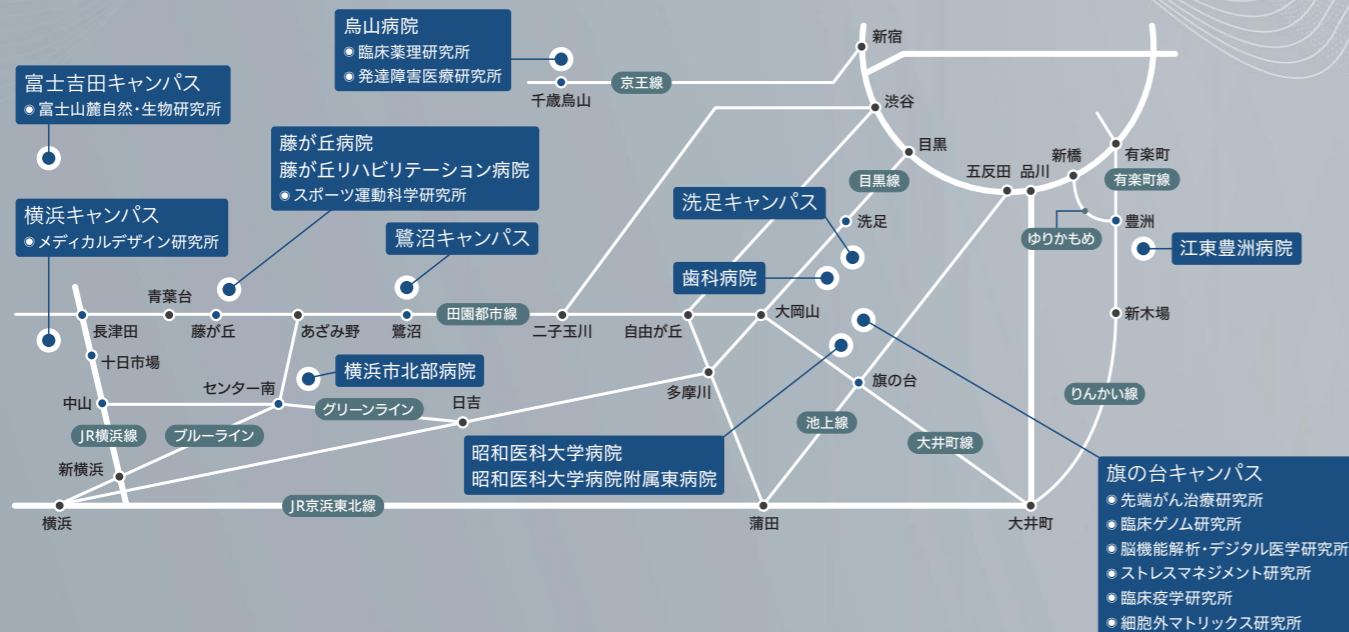


GRADUATE SCHOOL OF MEDICINE

GRADUATE SCHOOL OF DENTISTRY

GRADUATE SCHOOL OF PHARMACY

GRADUATE SCHOOL OF HEALTH SCIENCES



本学は「社会の文化と公共の福祉に貢献する」ことを学則にうたい、  
何よりも国民の健康に寄与することを大きな目標に、  
建学の精神である『至誠一貫』を体現する教育・研究に努めています。

## SHOWA MEDICAL UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL

GRADUATE SCHOOL OF MEDICINE

GRADUATE SCHOOL OF DENTISTRY

GRADUATE SCHOOL OF PHARMACY

GRADUATE SCHOOL OF HEALTH SCIENCES



### 「至誠一貫」の精神

上條 秀介 Shusuke Kamijo

昭和医科大学は創立後まもなく、『至誠一貫』の方針を掲げました。

創立者の上條秀介博士は、「社会に役立つ医師や医療職になろうとする一貫した至誠の理想を体得するならば、学生諸君はおのずから真剣となり努力せずにはいられないはずだ、自粛自制をもって『至誠一貫』の真の精神を日常の実践に活かしてもらいたい」と学生を鼓舞しました。

『至誠一貫』は単なる標語ではなく、学問を学び、医療に携わる一人ひとりの確固たる信念を指していたのです。博士は入学式においても、「古語に曰く『医は仁なり』すなわち、この仁の気持ちは至誠であります。将来、悩める人に接する医者に、この気持ちが絶対に欠けてはならないのであります。この至誠をどこまでも貫くということを我らは片時も忘れてはならない。『至誠一貫』は本校の校是であり同時に校風なのであります」と述べています。

PRESIDENT'S MESSAGE

## 医療分野の未来を拓く皆さんへ

本学大学院には、医学研究科博士課程（4年）、歯学研究科博士課程（4年）、薬学研究科博士課程（4年）、保健医療学研究科博士前期課程（2年）および博士後期課程（3年）の4研究科があります。

その大きな特徴は、4研究科が揃う医系総合大学の大学院であり、それぞれの研究科が壁を作らず研究活動を行えることです。

また、最高水準の設備とスタッフを擁する8つの附属病院には、研究と教育の両面で最良の環境が整っており、臨床と基礎が密に連携して研究を進めています。

現在、本学大学院では修士が毎年約100名を数え、4研究科それぞれの分野の未来を拓く研究者や指導者として社会に貢献する優れた医療人を輩出しています。

ぜひ、本学大学院で、皆さんの若いエネルギーと貴重な時間を有意義に使い、後世に残る研究成果を挙げていただきたいと願っております。



昭和医科大学 学長

上條 由美

Yumi Kamijo

昭和医科大学大学院は「至誠一貫」の精神をもとに、  
より高度な医療や研究に邁進し、人類の幸福に貢献する人材の育成を目指しています。  
入学選抜にあたり、私共は次のような多様な学生・社会人を広く求めます。

アドミッション・ポリシー

### ADMISSION POLICY

- 医療・健康・生命科学の専門知識を深く追究する意欲のある人
- 常に探究心を持ち、先進的な医療を担う意欲のある人
- 自らの活動領域を拡げ、医系総合科学を発展させる意欲のある人
- さまざまな分野の専門家と共に、先端的・独創的な研究を志す人
- 社会での実践から得た知識と経験を体系化し還元する意欲のある人
- 国際的視野を持ち、国内外へ向けて広く成果を発信する意欲のある人
- 真摯に学び、高い倫理性と豊かな人間性を持つ指導者を志す人

# 大学院の魅力



## 01 4つの研究科と8附属病院が連携、ボーダレスな研究環境

昭和医科大学大学院の特色は、医学・歯学・薬学・保健医療学の4つの研究科がそれぞれの専門領域を超えて、連携し合える環境にあります。さらに8つの附属病院と連携し、数多くの症例や臨床データを科学的なアプローチで究明したり、あるいは基礎研究で得られた発見を臨床に応用するなど、臨床と基礎が融合した研究環境が整っています。

### なぜ、この人は治ってあの人は治らないのか？

「同じ病名なのに、経過がまったく違う患者さんがいる。それをずっと不思議に思ってきました」

そう語るのは、口腔生化学分野で薬剤関連顎骨壊死(以下、MRONJ)の研究に取り組む、顎顔面口腔外科学所属の歯科医師、橋本有希子さんです。臨床の現場で抱いた素朴な疑問が、現在の研究テーマの出発点になりました。

MRONJの診療現場では、壊死した骨(腐骨)が健康な骨から自然に分かれて症状が落ち着く患者さんがいる一方で、別の患者さんでは腐骨が明瞭に分離せず、病変が骨全体に広がり、手術しても再発を繰り返します。「腐骨がきれいに分かれる”症例は、再燃が少なく、結果的に患者さんの負担も小さくなります。では、その差は何によって生まれるのでしょうか」

橋本さんが注目したのは、腐骨と健康な骨(母骨)の境界部分です。画像診断や肉眼所見では見逃されがちです

が、実際にはその境目に「結合組織」と呼ばれる細胞やタンパク質の集まりが存在しています。「この結合組織が、腐骨を外へ押し出すように働いているのではないかと、この仕組みがうまく機能しないと、病変が広がってしまうのではないかと考えました」

橋本さんは、MRONJの手術で切除された顎骨組織を用い、腐骨と母骨の間に存在する結合組織を詳細に解析しています。細胞の種類やタンパク質の分布、さらには空間的な配置までを包括的に調べることで、これまで見えていなかった病態の理解を目指しています。現在、MRONJの外科治療では、骨の切除範囲を客観的に判断する指標が乏しく、術中出血の有無など経験に基づく判断に頼る場面が少なくありません。一方、保存的治療では病変部を露出・洗浄し、腐骨の形成と分離を待つことで、最終的に自然治癒に至り、再燃が少ない症例もあります。

「保存療法でうまくいく患者さんには、必ず理由があるはず。その仕組みが明らかになれば、治療の選択肢は大きく広がると考えています」

### 生化学を軸に、医・歯・薬をつなぐ病態分子生化学研究センター

この研究は、ヒトの組織解析にとどまりません。得られた知見をもとに、特定の遺伝子を欠損させたマウスを作製し、MRONJモデルを用いてその役割を検証していきます。さらに、血流を変化させるモデルや、神経の働きを調整するモデルも用い、血管系や神経系が病態にどのような影響を与えているのかを詳しく調べる予定です。

橋本さんが研究を進めている拠点、病態分子生化学研究センターです。

このセンターは歯学部口腔生化学講座、医学部生化学講座、そして薬学部の講座が連携して設立された昭和医科大学ならではの研究拠点です。分子レベルから個体レベルまでを視野に入れた幅広い研究を推進することを目的としています。

「医歯薬学の協働、なかでも『がん領域』は、重点的に取り組んでいる共通の研究分野です。この領域の研究を進めるうえで重要な研究ツールである遺伝子組換えマウスをはじめ、共同利用を進めることで、個々の研究室では難しい研究を可能にしています」と語るのは、センター長の前濱朝彦教授(医学部生化学)です。橋本さんの研究にも、遺伝子組換えマウスなどで協働の利点が活かされています。

研究指導の面でも同様です。指導教員である塚崎雅之教授(歯学部口腔生化学)は、骨免疫学という新しい研究領域を切り開いてきた第一人者であり、特にマウスやヒトなど生きた体の中で起こる反応を調べる研究において豊富な経験を有しています。

「異なる専門性や研究スタイルをもつ研究者が同じセンターに集まっています。大学院生には、センター内でのディスカッションを通じて、さまざまな視点から研究を見つめ、発展させる力を身につけてほしいと考えています」と語る塚崎教授。橋本さんにも一つの専門にとどまらず、異分野の知見を柔軟に取り入れながら研究を深化させていく姿勢を感じているそうです。

「MRONJは“仕方がない病気”ではありません。病態を正しく理解すれば、もっと患者さんに優しい治療ができるはずです」と話す橋本さん。経験や勘に頼ってきた医療を、科学的根拠に基づく医療へ。橋本さんの静かな挑戦は、次の治療の扉を確実に開こうとしています。

## 02 医療人と大学院生が両立できるプログラム 社会人受入制度

昭和医科大学大学院では、社会人の受入れを積極的に推進しています。平日の日中は医療人として専門分野で勤務をしながら、平日の夜間および土日に開講される講義を受講することで単位を修得できるよう、各研究科ともにカリキュラムを整備しています。さらに、オンライン授業の取り組みも進めています。また、臨床研修医、臨床研修歯科医、臨床研修薬剤師も社会人として入学し、基礎系科目を専攻することが可能です。

## 03 充実した施設と支援で高度な研究に対応 共同研究施設、支援の詳細は > P.16

各研究科・講座の研究室のほかに、高度な研究に対応した、共同で使える施設があります。私立大学では有数の機器もそろい、施設スタッフのサポートのもと大学院生も活用できます。

また統括研究推進センターでは研究に関するさまざまな支援が受けられます。セミナーやワークショップのほか、個別の研究の相談、論文執筆の支援も行っており、大学院生にも開かれています。

## 薬剤関連顎骨壊死(MRONJ)の“分かれ道”を解き明かす

GRADUATE SCHOOL OF DENTISTRY  
橋本 有希子さん  
歯学研究科  
顎顔面口腔外科学/口腔生化学  
1年次  
※学年・役職は2026年3月現在



病態分子生化学研究センター長  
医学部生化学講座  
前濱 朝彦 教授(中央) 指導教員  
歯学部口腔生化学講座  
塚崎 雅之 教授(右)

## 個々が能力を十分に発揮できる研究環境と社会人大学院生に対する積極的なサポート

研究科長 泉崎 雅彦  
Masahiko Izumizaki



本医学研究科は、最先端の基礎研究、臨床研究の分野で活躍する指導教員が、医療、医学研究の担い手、指導者として活躍する人材を育成しています。生命科学・医学研究者を目指す人、高度な専門知識と技術を持った臨床医を目指す人、医学部以外出身者で出身学部の特性を生かした医学研究者を目指す人などに広く門戸を開き、社会および医学・生命科学の課題に対し、個々人が能力を十分に発揮できる研究環境を備えています。また、昭和医科大学には、昭和医科大学病院をはじめとする8附属病院と専門的な各研究所があり、最先端の分野で活躍する教員と充実した設備を備えています。

指導教員は、講義、演習、実習、学会発表や学位論文の作成等に対する指導を通して、大学院生が深い洞察力および専門的

知識と技術を修得できるよう支援します。さらに、研究分野に関わらず、大学院生は「共通科目」を履修し、医学研究に共通して必要な知識や技術を修得します。また、大学院修了後には自らの学識を他者に教授する機会が多く見込まれるため、指導者としての教育能力を育むプログラムを用意しています。

本医学研究科は、社会で働いている方々を積極的に受け入れています。教員は社会人大学院生への指導経験も多く、充実した大学院生活が送れるよう積極的にサポートします。皆様が昭和医科大学大学院医学研究科で研鑽を積み、医療、医学研究の担い手として、そして指導者として大いに活躍することを願っています。



医学研究科サイト

### ■ 研究分野および指導教員 (2026年4月1日現在)

顕微解剖学	川西 邦夫
肉眼解剖学	大塚 成人
生体制御学	砂川 正隆
生体調節機能学	泉崎 雅彦
生化学	前濱 朝彦
臨床病理診断学	矢持 淑子
医科薬理学	小口 達敬
臨床薬理学	内田 直樹
微生物学免疫学	伊與田雅之
衛生学公衆衛生学	小風 暁
法医学	松山 高明
医学教育学	泉 美貴

呼吸器アレルギー内科学	田中 明彦
リウマチ・膠原病内科学	矢嶋 宣幸
糖尿病・代謝・内分泌内科学	山岸 昌一
消化器内科学	角嶋 直美
循環器内科学	新家 俊郎
腎臓内科学	本田 浩一
血液内科学	服部 憲路
脳神経内科学	村上 秀友
腫瘍内科学	堀池 篤
緩和医療学	横山 和彦
臨床感染症学	時松 一成
リハビリテーション医学	川手 信行
皮膚科学	猪又 直子
小児内科学	水野 克己
小児循環器内科学	藤井 隆成
精神医学	真田 建史
放射線科学	扇谷 芳光
放射線治療学	伊藤 芳紀
総合診療医学	小風 暁 (代行)

心臓血管外科学	山口 裕己
小児心臓血管外科学	宮原 義典
呼吸器外科学	小林 正嗣
消化器一般外科学	青木 武士
乳腺外科学	林 直輝
小児外科学	渡井 有
脳神経外科学	諸藤 陽一
整形外科	工藤 理史
形成外科学	門松 喬一
産婦人科学	関沢 明彦
眼科学	恩田 秀寿
泌尿器科学	押野見和彦
耳鼻咽喉科頭頸部外科学	嶋根 俊和
麻酔科学	大江 克憲
集中治療医学	阿部 智一
救急・災害医学	土肥 謙二



### 修了生の活躍



小口 達敬さん  
2018年3月 博士課程修了  
昭和医科大学医学部  
薬理学講座医科薬理学部門 教授

### 研究は将来の患者さんを救うこと

私は大学院博士課程で病理系薬理学(医科薬理学)を専攻しました。当時、教授からいただいた「臨床は現在の患者さんを救うこと、研究は将来の患者さんを救うことである」という言葉が深く心に刺さり、研究に進出する大きな原動力となりました。この課程で得た最大の財産は、事象を論理的に解明する「科学的思考能力」です。特に、病態の進展と治療薬の機序を構造的に捉え、科学的プロセスに基づいて思

考できるようになったことは、現在の私にとって揺るぎない基盤です。また、同時期に大学院生として切磋琢磨した仲間との絆は、今でも互いを高め合える貴重な財産です。

現在は、自らの経験を還元すべく、後進の育成にも力を注いでいます。研究に興味を持ってくださった皆さんと一緒に知性を磨き、将来の患者さんを救っていただけるよう頑張っています。

## 研究と臨床、その両立の先に見えるもの 腎疾患の本質に迫り、未来の治療へ

梶尾優希さんは、昭和医科大学・腎臓内科の医師で、顕微解剖学分野に所属して研究に取り組んでいます。学部4年次から大学院の一部の講義を履修できる「マルチドクタープログラム」を選択し、卒業と同時に大学院に進学しました。初期臨床研修の2年間は休学し、腎臓内科への入局と同時に復学して学位論文に取り組みました。テーマは、慢性腎臓病(CKD)とネフローゼ症候群です。「慢性腎臓病は、成人の5人に1人が罹患しているといわれる国民病です。進行すると末期腎不全に至り、透析が必要になります。その進行に深く関わっているのが蛋白尿です」

腎疾患の一つであるネフローゼ症候群は、高度の蛋白尿をきたす疾患であり、長期的に末期腎不全へ進行する症例も少なくありません。臨床現場でネフローゼ症候群の患者さんを診療する中で、梶尾さんは治療に難渋する症例や再発を繰り返す症例を経験しました。その中で、病態の根本的な解明が重要であると強く感じるようになったといいます。「私は腎臓内科医として透析を減らしたいという思いが強く、そのための病態解明に関われるこ

とに大きな魅力を感じています。臨床業務と研究の両立や実験手技に苦戦することも多くありますが、その積み重ねの中で得られる成果には大きなやりがいを感じています」

腎臓には、血液をろ過するフィルターの役割を担う構造があります。その最前線で働いているのが、ポドサイトと呼ばれる細胞です。梶尾さんは、このポドサイトが障害されるメカニズムの解明に取り組んでいます。

### 大学の枠を超えて 成果が出せる研究者として

梶尾さんの指導教員である川西邦夫教授(顕微解剖学)は、「よい研究はよい問いから始まります」と話します。梶尾さんがネフローゼ症候群の患者さんを診療する中で、治療に難渋する症例や再発を繰り返す症例への疑問を基礎研究に生かしているのは、その一例といえるでしょう。もうひとつ、川西教授が重視するのはコラボレーションができる研究者になることです。「現代の医学研究では、コラボレーションのない研究領域はむしろ稀です。専門性を持ちながら他者と協働して成果を出せる研究者になってほしいですね」

その第一歩は大学院生同士が協力して研究を進めることだと川西教授は指摘します。梶尾さんは強い責任感と、能力の高さから、すべてを自分一人で抱えがちでした。「アドバイスしたのは、データの機密性に配慮しながらも、大学院生同士で実験手法や解析につ



いて情報交換を行い、チーム内では臨床との両立を踏まえて相互に補助し合うなど、より良い研究の進め方を意識してほしいということです」

川西教授は必要な実験手技も丁寧に教えました。例えば、梶尾さんは当初、マウスの静脈内投与を吸入麻酔で眠らせた状態で行っていましたが、その方法では末梢血管の状態によっては注入が難しい場合がありました。そこで川西教授は、麻酔に依存せずに手技を安定させる方法を指導しました。これは、若手の頃に別の研究者から教わった手法であるといいます。具体的には、マウスを確実に固定できる工夫に加え、投与前に適度に加温して静脈を浮き上がらせる方法です。こうした一つひとつの工夫が、薬剤投与の成功率向上につながりました。

3年間で学位を取得した梶尾さんは、脂質異常症治療薬によるポドサイト保護効果について、さらに研究を継続しています。将来は他施設の研究者も巻き込みながら、新たな治療戦略につなげ、腎疾患の進行抑制や患者さんの予後改善に貢献することを目指しています。

顕微解剖学

3年次  
院生 梶尾 優希さん

指導教員 川西 邦夫 教授

※学年・役職は2026年3月現在

## 研究を志す諸君へ 人生には必ずチャンスが回ってくる

“歯科医師国家試験に合格し臨床研修を終えたら大学院に進学しようか、それとも歯科医師の仕事を始めようか”このように迷っている人が若い皆さんの中には数多くいると思います。私からアドバイスするとすれば、大学院に進学するにあたって必要なのは、科学と医療への「好奇心」や「貢献心」であって、「才能」とか「見栄」ではありません。

大学院歯学研究科では、基礎分野、臨床分野ともに「研究に向き合い続ける」ことが生活の中心となり、皆さんがこれまで経験したことのない苦しみと楽しさを味わうこととなります。そこでは、指導教員や先輩として患者さんから多くのことを学び、自分自身と向き合うことで研究者としてだけでなく、高い見識と適応力を備えた教育者や歯科医師としても成長してい

研究科長 高見 正道  
Masamichi Takami



きます。このように、大学院歯学研究科に進学して自己研鑽することは、長い人生の中で数少ない「チャンス」の1つと言えます。このチャンスには様々なトラブルや挫折も伴いますが、その長いトンネルを抜けると、今よりもひと回り成長した自分がいるのは確かです。

大学院歯学研究科の幅広い研究分野の中には、皆さんにとって興味や、やりがいを感じる研究テーマが必ずあるはずです。それがわからない時は、教員や大学院生など、誰でもいいので相談してください。自らの将来を見据え、高い志を持って生きて行こうとする皆さんの大学院進学を楽しみにしています。

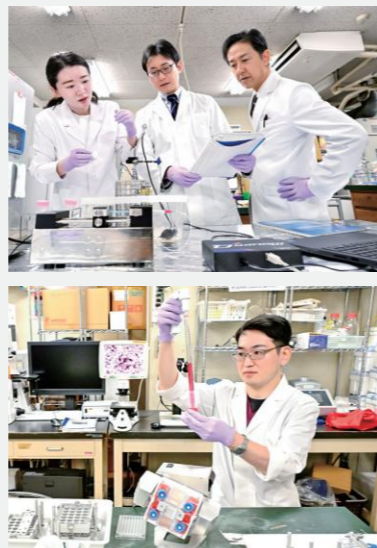


歯学研究科サイト

### ■ 研究分野および指導教員 (2026年4月1日現在)

歯学教育学	坂井 信裕	顎顔面口腔外科学	大場 誠悟
口腔解剖学	野中 直子	顎関節症治療学	菅沼 岳史
口腔生理学	中村 史朗	口腔腫瘍外科学	馬場 一美 ※
口腔生化学	塚崎 雅之	歯科矯正学	中納 治久
口腔微生物学	桑田 啓貴	歯科放射線医学	松田 幸子
歯科薬理学	高見 正道	インプラント歯科学	宗像 源博
歯理工学	柴田 陽	小児成育歯科学	船津 敬弘
口腔病理学	美島 健二	口腔機能管理学	古屋 純一
口腔再生医学	田中 準一	口腔機能リハビリテーション医学	伊原 良明
口腔衛生学	弘中 祥司	歯科麻酔科学	増田 陸雄
保存修復学	小林 幹宏	総合内科学	馬場 一美 ※
歯内治療学	鈴木 規元	医科歯科連携診療歯科学	馬場 一美 ※
歯周病学	山本 松男	障害者歯科学	馬場 一美 ※
歯科補綴学	馬場 一美		

※ 教授代行および研究分野責任者



湯浅 研さん  
2014年3月 博士課程修了  
愛媛県松山市三津にて開業  
福岡歯科医院 院長

### 大学院は知識との向き合い方を鍛える場所

大学院での研究は「知る」という行為そのものを根本から見直す経験でした。論文を読み、執筆し、統計処理と向き合う中で気づいたのは、情報には必ず「階層」があるということです。どんな権威ある論文にも執筆者の意図や文脈が潜んでおり、それを見抜く批判的な視点は、研究を通じてはじめて身につくものでした。この視点は、現代の情報過多な社会においても、日常的に役立ち続けています。

また、「世界中の誰もまだ知らないことを探す」ことの重さと面白さ、そして思うように進まない日々の先にわずかな光を見つけたときの達成感、大学院でなければ決して味わえないものです。進学を考えている方に伝えたいのは、大学院は知識を増やす場所ではなく、知識との向き合い方を鍛える場所、その力は、どの分野に進んでも生涯にわたってあなたの思考を支えてくれるはずです。

### 修了生の活躍

## 臨床の疑問からより良いインプラント治療へ 硬組織研究の最前線からアプローチする

北田理子さんは、昭和医科大学歯科病院のインプラント歯科に所属しながら、歯科理工学分野で研究に取り組んでいます。歯科インプラント治療では、失われた骨を補う「骨造成術」が欠かせない場面があります。その際に使われるのが、人工の骨補填材です。

北田さんは、日々の臨床で使われているこの骨補填材に着目し、基礎研究の立場からその特性を明らかにしようとしています。これまで骨造成術の評価は、「骨補填剤によってどれだけ骨が増えたか」という量に注目したものが中心でした。しかし、北田さんはそこに限界を感じていま

「近年さまざまな種類の骨補填材が使用されていますが、『どの材料が、どのような質の骨をつくるのか』といった骨の強さや性質に関する裏付けは、まだ十分とはいえないのが現状です」

北田さんはラットを用いた実験を通して、骨密度の測定や石灰化の度合いの比較、新生骨の機械的特性に着目した骨強度の評価を行い、骨補填材ごとの違いを多角的に調べました。「普段臨床で何気なく使っている材料を、自分の

手で測定し、数値として確かめられるところに面白さを感じています。臨床で抱いた疑問が、基礎研究で少しずつ解決していく過程が楽しいです」

### ナノインデンテーションで 新生骨の機械的特性を探る

新生骨の機械的特性の測定では、北田さんの指導教員である歯科理工学分野の柴田陽教授が専門とするナノインデーターを使用しました。柴田教授は装置の使い方の難しさを説明します。「ナノインデンテーションは、微小な力を加えて硬さやしなやかさを測る装置です。力の加え方は研究者がプログラムする必要があります。さらに、測定結果に、さまざまな関数を当てはめてその意味を考察しなければなりません」

北田さんは柴田教授から指導を受けながら、得られたデータを解析していきました。

研究の結果、術後4週の時点で最も新生骨の形成が顕著だったのは、ハイドロキシアパタイト(以下、HA)でした。一方でナノインデンテーションによる力学的な解析から、HAによって形成された新生骨はしなやかではあるものの、まだ完全

## 研究の現場を 訪ねて

に成熟していない骨であることが示されました。「この結果がもたらす大きな示唆は、『骨造成後、いつインプラントを埋入するべきか』という判断にあります。骨補填材の違いが、骨の質や成熟のスピードにどのように影響するのかを明らかにすることで、より安全で、長く使えるインプラント治療につながると考えています」

北田さんが所属するインプラント歯科学分野の宗像源博教授は、研究テーマの出発点が臨床にあるところを評価しています。

「インプラント歯科は、臨床と切り離して考えることはできません。日々の診療の中で感じた疑問や違和感こそが、研究の原点になるべきだと考えています」

宗像教授は「研究結果が、将来の患者さんに、どのように役立つのか」を常に意識すれば、研究のモチベーションも上がると思います。

臨床の現場で感じた疑問を、研究で確かめ次の医療につなげていく。基礎研究と臨床、ふたりの指導教員に支えられながら、北田さんの挑戦はインプラント治療の確かな根拠づくりへと着実に繋がっています。

### インプラント歯科学 歯科理工学

3年次  
院生 北田 理子 さん

※ 学年・役職は2026年3月現在



## 神経障害性疼痛治療に新しい選択肢 経皮吸収製剤の研究に挑む

坂間利奈さんが大学院に進んで基礎研究に取り組もうと考えたきっかけは、臨床薬剤師として患者さんから薬の副作用についての悩みを聞いたことでした。「産婦人科病棟で臨床研修薬剤師として勤務していたときのことで。抗がん剤治療をされている患者さんのなか、副作用によって治療を続けることにマイナス思考を持ってしまわれる方がいました。そんなとき、もっと薬の選択肢が増えて、副作用も減らしていければよいと考えたのです。その第一歩が基礎研究だと考えて、大学院進学を決めました」

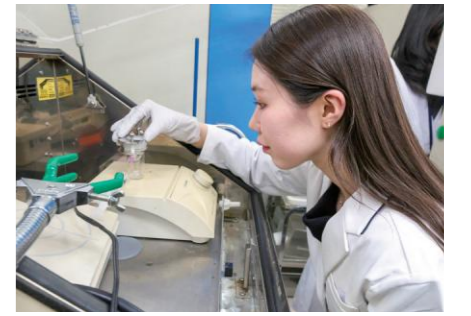
現在、坂間さんが取り組んでいる研究テーマは、神経の損傷などが原因で起こる「神経障害性疼痛」の薬であるプレガバリンを「飲む薬」ではなく皮膚に塗って使う薬にするための基礎研究です。「プレガバリンは効果の高い薬ですが、体全体に

作用することで中枢神経系の副作用が出やすいという問題があります」と坂間さんは話します。そこで注目されているのが、経皮投与と呼ばれる方法です。薬を皮膚から少しずつ体内に届けることで、必要な部位に作用させながら、全身への影響を抑えられる可能性があります。患者さんにとっても負担が少なく、治療を続けやすいという利点があります。

### 失敗の繰り返しこそが 研究者としての成長の機会

坂間さんの研究では、プレガバリンを含む経皮吸収製剤を作り、薬を支える土台となるクリームなどの違いによって、皮膚からの吸収のされ方がどう変わるのかを調べました。

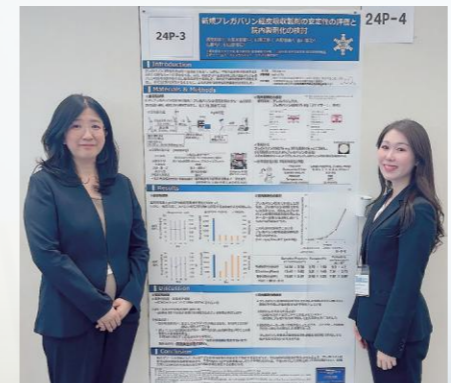
学部生の頃から実験に取り組むことが好きだったと振り返る坂間さんですが、実験はトライ&エラーの連続でした。実験用のマウスの皮膚をフランチ拡散セルという装置に装着し、さまざまな製剤を塗布して8時間観察します。しかし、途中で製剤が漏れてしまったり、気泡が入ったり、データをとるための条件がそろわないことがしばしばでした。そんなとき、坂間さんを救ったのは指導教員の杉山恵理花教授(薬物動態学)です。「実験では、微妙な条件の違いによって思いどおりの結果が得られないことがあります。そうした場面では、器具や装置の扱い方を工夫しながら、試行錯誤して解決策を見つけていく必要があります。私が過去に試してうまくいった方法



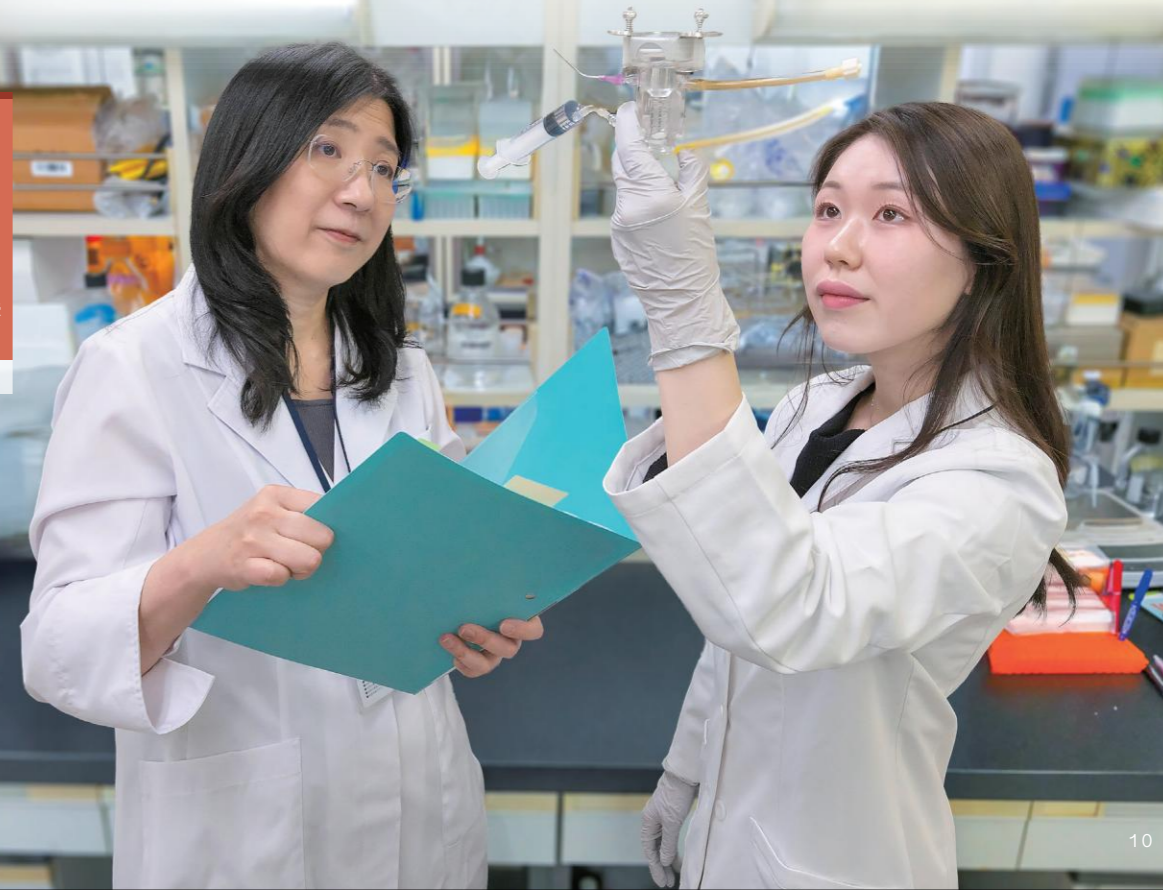
を紹介したり、坂間さんと一緒に解決策を探っていた感じですね」と振り返る杉山教授。ときには、実験に役立つような部品をホームセンターに探しにいくこともありました。「研究は、思い通りに進まないことの方が多いものです。しかし、その過程こそが大きな学びになるのです」

杉山教授の指導で特に印象に残っているのは、データ解釈や考察について常に投げかけられる問いだったと、坂間さんは話します。「なぜそう考えるのか、と繰り返し問われることで、研究者としての思考力が鍛えられました」また研究面だけでなく、将来の進路やキャリアについても親身に相談に乗ってもらえたことは、精神的に大きな支えになりました。

坂間さんは、得意の英語を活かして、将来は海外で活躍したいという夢を持っています。学位を携えて教員となったあかつきには、留学という形でそれが叶う日も遠くないでしょう。



薬物動態学  
4年次  
院生 坂間 利奈さん  
指導教員 杉山 恵理花 教授  
※学年・役職は2026年3月現在



## 多様なニーズに応える様々な 研究指導体制とキャリアパスにより 将来のリーダーを育成する薬学系大学院へ

研究科長 野部 浩司  
Koji Nobe



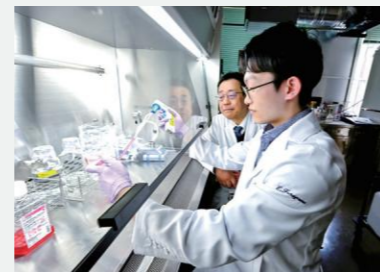
薬物による治療は近年めざましい変化と革新を遂げ、これまで困難だった疾患の治療薬が登場する一方で、経験したことのない有害作用が発現することもあります。そのため、多様な「薬」を把握し、適切な使用や管理を統括できるプロフェッショナルの存在が強く望まれています。

昭和医科大学大学院薬学研究科は、「薬」に関するプロフェッショナルである、「博士(薬学)」を育成するだけでなく、高い実践的能力を持ち、医療の場でその力を発揮できる人材の育成を目指しています。加えて後進を指導できる優れた教育者を育てることも大切な目的としています。その達成のため、我々は2018年より「研究力向上」を重点テーマとした改革を進めてきました。その柱として、大学院生への研究指導資格を明確にし、個々のニーズに合わせた専任の指導者を配置し、定期的な研究

進捗確認や充実した学術的・経済的サポート体制を構築しています。基礎研究だけでなく臨床研究を通して学位を有する臨床薬剤師が高い専門性を発揮できるように教育を進めています。

このような取り組みにより、薬学研究科は国内最大の薬学系大学院へと成長しましたが、重要なことはその規模が日本一であるということではなく、在籍者ひとりひとりに対して十分な研究指導を行い、高い学位取得率を維持している点です。

現在、薬学のプロフェッショナルが解決しなければいけない点は多くあります。その過程で様々なことを学び、技術と経験を積んでいただく大きなフィールドを私たちは提供しています。私たちは、2028年の創立100周年に向けてさらなる大学院改革を進めてゆきます。充実した大学院薬学研究科と一緒に造っていきましょう。



### ■ 研究分野および指導教員 (2026年4月1日現在)

薬学教育学	小林 靖奈	衛生薬学	原 俊太郎
医薬化学	福原 潔	薬剤疫学	今井志乃ふ
生体分析化学	加藤 大	薬物治療学	向後 麻里
生物物理化学	合田 浩明	天然医薬治療学	川添 和義
生物化学	宮崎 拓郎	感染制御薬学	石野 敬子
生体分子機能修飾学	秋山 雅博	がんゲノム医療薬学	藤田 健一
薬理学	野部 浩司	臨床栄養代謝学	千葉 正博
生理学	上條翔太郎	臨床研究開発学	肥田 典子
製剤設計学	勝見 英正	臨床病態学	磯崎 健男
薬物動態学	杉山恵理花	病院薬剤学	田中 克巳
社会薬学	岸本 桂子		



稲垣 貴士さん  
2023年3月 博士課程修了  
昭和医科大学薬学部  
病院薬剤学講座 助教  
昭和医科大学病院薬剤部

### 臨床現場での疑問を研究に発展させる

大学院では「薬物治療学分野」を専攻しました。私は病棟業務の中で、抗がん剤の多様な副作用に苦しむ患者さんに接して、その解決策が十分でない現状を実感し、副作用のリスク因子を解明するための研究を立案しました。先生方の親身なご指導により、研究立案から統計解析・論文化までを主体的に遂行する力を養うことができました。学位取得までは厳しい道のりでしたが、臨床の疑問を解決する過程で

### 修了生の活躍

通じ、臨床研究の楽しさを知ることができました。

大学院での経験は、現在の病院薬剤師の業務に活かされ、がん専門薬剤師の取得にもつながっています。また、研究室は屋根瓦式の指導体制で、先輩や後輩と程よい距離感で接した経験が、後進の育成にも生きています。今後は臨床と研究を両立させながら、がん薬物療法の発展と教育に貢献していきたいと考えています。



薬学研究科サイト



保健医療学研究科サイト

## 幅広く多彩な研究領域において、保健医療学の専門職教育を担う研究・教育者を育成

保健医療分野の職種を越えた「知と技術の体系化」を目指すとともに、保健医療学の学問的体系に基づいた高度専門職者の教育を担える研究者・教育者の育成を行います。現代社会で生じる健康問題や、それらに関する多面的要因に関する研究を行い、最新の科学的知見と、それに基づく保健医療の実践を社会に向けて発信しています。

保健医療学において、幅広い専門職種が学びを深められるように多彩な科目を開講し、学びたいと思われる方々に広く門戸を開いています。社会人の大学院生のために、学ぶ方々の都合を考慮して開講していますので安心して学ぶことができます。

博士前期課程は、論文を作成する論文コースと保健医療の高度実践を習得する専門コースがあります。論文コースには

研究科長 三村 洋美  
Nadami Mimura



4つの分野、19の領域があります。所属する分野・領域以外からの学びも取り入れて研究に取り組めるように科目を準備しています。広がりのある保健医療学の研究に取り組めます。専門コースでは、CNS(高度実践看護師)、医学物理士、認定遺伝カウンセラー、アスレティックトレーナーを目指すことができます。CNSをのぞいては医療系のライセンスがなくても取得できます。

博士後期(博士)課程は、4つの専門教育研究分野で構成されており、保健医療学分野の学術の理論構築および応用の開発に取り組み、高度な専門職業人として、これからのチーム医療を創造する研究・教育者の育成を行います。博士前期課程から継続して研究を進めることもできます。

### ■研究分野および指導教員(2026年4月1日現在)

博士前期課程	分野	領域	指導教員
医系基礎・専門・教育		形態解剖学	飯塚眞喜人
		病態生理学	下平 和久
		統合医療学	田中 晶子
		医療マネジメント学	上條 由美
		医療人教育学	榎田めぐみ
		臨床栄養学	安部 聡子
看護		臨床看護ケア開発学	三村 洋美
		コミュニティケア開発学	富田真佐子
		看護マネジメント学	大崎千恵子
論文コース		生体機能学	仲保 徹
		運動機能学	加賀谷善教
		中枢神経機能学	中村 大介
		精神機能学	鈴木 久義
		言語聴覚機能学	小林 一女
		視覚機能学	岩淵 成祐
医療技術		臨床検査学	安原 努
		診療放射線学	三村 洋美(代行)
		臨床工学	大石 竜
		口腔保健学	弘中 祥司

博士前期課程	分野	領域	指導教員
専門コース	専門看護師(CNS)	老年看護学	三村 洋美
		精神保健看護学	榎田めぐみ
		がん看護学	渡邊 知映
		遺伝カウンセリング	渡邊 知映
		遺伝カウンセリング学	渡邊 知映
論文コース		医学物理教育	宮浦 和徳
		アスレティックトレーニング	加賀谷善教

博士後期課程	分野	指導教員
論文コース	医系基礎・専門・教育	飯塚眞喜人
	看護	三村 洋美
	リハビリテーション	加賀谷善教
	医療技術	三村 洋美(代行)



水井 美生さん  
2025年3月 博士後期課程修了  
昭和医科大学保健医療学部  
看護学科 講師

### 助産師のやりがいや就業支援をテーマに

大学病院で働けなかつた、「多くの助産師が、よりやりがいを持って働き続けるには何が必要か」と考えるようになりました。その思いを出発点に、博士前期課程では「育児休業取得後の助産師の復職支援」、博士後期課程では「助産師の職務満足度」をテーマに研究し、助産師の職務満足度の特徴や長期的な就業支援における課題を明らかにしました。

現在は昭和医科大学保健医療学部で講師として学生教育

に携わり、大学院で得た知見を活かして、臨床の皆さまのご協力もいただきながら、看護職の職務満足度の向上や生涯教育支援に関する研究を進めています。大学病院での就業を継続し、出産・育児と両立しながらの大学院での研究は決して容易ではありませんでしたが、その経験は今の私の大きな糧となっています。皆さんの研究が保健医療学のさまざまな分野の発展につながることを、心より応援しています。

### 修了生の活躍

## 体にやさしい術後CT検査を実現したい 脳動脈瘤治療後評価に広がる新たな選択肢

脳動脈瘤の治療現場では、わずかな画像の違いが治療方針を左右することがあります。博士後期課程・医療技術分野で学ぶ診療放射線技師の高橋拓也さんは、臨床の最前線で感じた疑問をきっかけに、大学院進学を決意しました。「同じ患者さんでも、撮影条件や画像の種類によって評価できる場合とできない場合があります。その理由を科学的に説明できないことに、医療者としての限界を感じました」

臨床経験を重ねる中で芽生えたこの問題意識が、高橋さんを研究の道へと導きました。本学大学院を選んだ理由は、勤務している藤が丘病院と研究環境が密接に連携している点でした。「日々の診療で生まれた疑問を、そのまま研究テーマとして掘り下げられるところが魅力です。症例から得た疑問を研究に反映し、その結果を翌日の臨床に生かす。そんな循環が自然にできています」

高橋さんの平日は、病院での臨床業務が中心です。研究や論文執筆は、夜間や休日を活用して

進めています。臨床と研究を切り分けるのではなく、日常業務の延長として研究があるのが大学院生活だと語ります。

現在、高橋さんが取り組んでいるのは、脳動脈瘤の血管内治療後のフォローアップのCT検査に関する研究です。血管内治療が主流となった現在、治療後も長期にわたる経過観察が必要な患者さんが増えています。

「繰り返し行う検査だからこそ、できるだけ患者さんの負担を減らしたいと考えました」

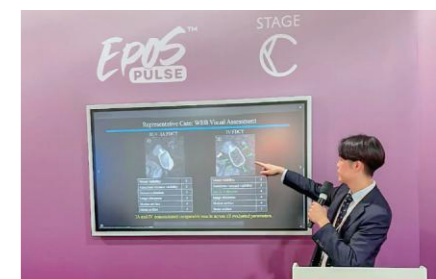
研究では、脳動脈瘤治療後の患者さん15症例を対象に、CT検査においてカテーテルを使って脳の近くから造影剤を注入する方法と、患者さんの負担が少ない腕の静脈から注入する方法(静注法)を比較しました。画像の見やすさを数値化し、客観的な評価を行うことで、静注法の有用性を検証しました。

単に画像の美しさを比べるのではなく、診療に必要な情報が十分に得られるか評価する点がこの研究の特徴です。「安全性を高めながら、より続けやすい検査につながる可能性があるところに、この研究のおもしろさがあります」

### 多職種と連携するために 専門用語に頼らず発信

高橋さんの指導教員である渡邊裕之准教授は大学院生に専門性と同時に伝える力を養ってほしいと語ります。

### 研究の現場を 訪ねて



「研究には論理的に考える力が欠かせません。それに加えて、自分の研究成果を専門外の人にも分かりやすく説明できる力を身につけてほしいと考えています。医療は多職種が連携して成り立つ分野です。だからこそ、専門用語に頼らず、自分の考えを伝える姿勢が重要だからです」

この教えを受けて、高橋さんはデータの整理に苦心したそうです。

「文献を読み、議論を重ねる中で、結果を根拠として構造化し、専門外の他者とも共有できる形にするようにしました。その経験は、臨床での判断にも良い影響を与えています」

2026年には単身でオーストリアの学会発表を行いました。そのために英語力を高め、発表後に現地の研究者と交流する機会もありました。

今後は患者さんの負担を減らす画像検査の研究を続けながら、医療の質と安全性の両立に貢献していきたいと語る高橋さん。臨床現場で生まれた疑問を研究と社会へ。その挑戦は、医療の未来を静かに、しかし確実に支えています。

### 医療技術分野

博士後期課程 2年次  
院生 高橋 拓也さん

指導教員 渡邊 裕之 准教授

※学年・役職は2026年3月現在

## 【博士前期課程】

## 論文コース 医系基礎・専門・教育分野

## 形態解析学

当領域では「ヒトおよび動物の正常構造と機能」を基にマクロからミクロのレベル、さらに遺伝子レベルまで幅広い範囲で基礎的研究を行います。対象領域として肉眼解剖学、比較解剖学、組織・細胞学、生理学、生化学などが含まれます。ヒトを対象としてリハビリテーション領域の臨床につながる研究も行うことができます。また、マウスやラットなどをを用いた動物実験による研究も行うことができます。職種や有する資格(免許など)は問いません。

## 医療マネジメント学

少子高齢化、医療の複雑化、医療費増大など医療における課題はたくさんあります。安定的な病院運営のためには、データに基づく解析と多職種を活かす組織運営が必要です。当領域では、医療現場において、質の高い医療サービスを効率的に提供するために必要なマネジメント能力を発揮できる人物の養成を目指しています。医療の質改善、地域連携、病院経営、運営管理、災害時の対応など様々な分野における専門的な研究を行っています。

## 病態生理学

当領域では人体の正常機能が破綻することによって引き起こされる疾患や症状の機序などの解明、さらにその予防や回復に関する研究を行います。対象分野は運動器、呼吸器、消化器、循環器、生殖器、神経系、代謝・体液系、内分泌系など広範囲にわたります。研究内容は医学、リハビリテーション学、看護学が基本となり、研究遂行には様々な先端的な研究手法を用います。ヒトを対象とするだけでなく動物実験による研究も行います。

## 医療人教育学

臨床の場において高度な実践力を発揮しつつ教育者としての立ち位置を持つ教員と、研究力も兼ね備え教育の場で活躍する大学教員の育成を目指します。医療専門職としての資質や能力をいかに育むか、学修成果をどのように測定するか等を探究し、大学教育や現任教育に活かせるようにしています。学修方略や学修成果に関する研究、教員に求められる能力の抽出等、研究テーマは様々です。

## 統合医療学

当領域では、保健医療学全般にわたる幅広い分野の研究を行っています。とくに地域医療の取り組み、地域との連携など、これからの医療の在り方を多角的な視点から捉え、医療・社会・生活者を見つめ研究に繋げています。その根底の視点として、人間を社会や自然環境との調和の中で生きている全体的(ホリスティック)な存在として捉え、また人間には自然治癒力が備わっているという視点を大切に研究を行っています。

## 臨床栄養学

栄養学は、人々の健康に深く関与していることから、予防から疾病の治療食まで幅広い分野があります。当領域では、臨床栄養学に加えて、看護やリハビリテーション分野における栄養学領域を広く範囲に取り扱います。研究内容は、臨床における治療食の効果検証の他、看護師が患者のために実施する栄養ケアや食生活のサポート、リハビリテーション栄養やスポーツ栄養等、運動実践に必要な栄養補給方法の研究も行っています。

## 論文コース 看護分野

## 臨床看護ケア開発学

臨床における看護ケアに関する研究を行います。看護技術や看護ケア評価をはじめ患者教育、臨床看護師のスキルアップ教育と幅広いテーマの研究を行います。臨床看護の実践を科学的に説明することを目指しています。看護師、助産師をはじめ看護のライセンスを持つ方、介護の専門職者の方や福祉系の方も研究ができます。

## コミュニティケア開発学

地域で暮らす人々の生活の質を高める取り組みとして、あらゆる健康レベルや発達段階にある人々への看護に焦点を当てた研究、地域で支える保健・医療・福祉のケアシステム開発の研究を行っています。人々が住み慣れた地域で自分らしく生活することを実現するために、地域での健康づくりや介護予防、子育て支援、訪問看護、病院から地域への継続看護など幅広い領域での個別ケアや集団・地域へのケアシステムの開発を目指しています。

## 看護マネジメント学

すべての看護職は看護業務を管理しているといわれるように、看護管理は管理者だけが行うわけではありません。当領域では、看護の目的である質の高いサービスの提供を実現するために、看護マネジメントの視点から必要な要素を探索します。具体的には、人材育成や業務管理、医療の質保証、目標管理、組織内コミュニケーションなどのテーマをとおして、臨床での疑問や課題を解決に導くことができる能力を育成します。

## 論文コース リハビリテーション分野

## 生体機能学

人間が生命活動を維持するうえで不可欠な生体機能に関して研究する領域です。加齢や運動に伴う生体機能の変化を分析し、最適なトレーニング方法などについて検証します。また、心臓、呼吸、腎臓、内分泌代謝など身体内部の様々な臓器障害やがん治療におけるリハビリテーションに関して、集中治療室で行う高度急性期医療から回復期・在宅医療に至るまで多角的な視点で臨床研究を行い、最新の知見や技術を発信していきます。

## 運動機能学

運動機能とはヒトが身体を動かす機能と定義され、本来は脳・脊髄・筋などの組織に動きかけ運動を起こす能力とされています。当領域では、特に筋や関節といった運動器の機能について、成長期から高齢者といった幅広い年齢層に対し研究を行います。健康人を対象にしたバイオメカニカルな研究を予防や臨床に応用するだけでなく、臨床研究を推進して運動障害に悩む対象者のリハビリテーションの開発研究を行う分野です。

## 中枢神経機能学

脳卒中などの脳損傷によって、感覚機能・運動機能・認知機能(高次脳機能)・精神機能などADL能力の向上を妨げる大きな要因となります。主に中枢神経系が関わる諸機能についてリハビリテーションの対象となる障害を全人的に捉え、認知機能障害や身体機能障害の症状特性に関して学修します。健康で質の高い生活を営むだけでなく、臨床研究を推進して運動障害に悩む対象者のリハビリテーションの開発研究を行う分野です。

## 精神機能学

精神機能学では主として、精神保健上の問題を抱える対象者・家族、精神保健医療福祉従事者自身を対象として研究を進めることとなります。また、精神保健医療福祉従事者に対する教育に関する研究も同等に重要です。臨床現場における種々の問題の解決につながる研究を展開するために必要な基礎的学力を得ることを目的としています。所属院生は作業療法士、保健師、看護師、理学療法士、社会福祉士および精神保健福祉士等を想定しています。

## 言語聴覚機能学

言語聴覚機能学は聴覚、音声言語、そしゃく・嚥下に関する領域を扱います。言語聴覚士を中心に、音声言語障害、聴覚障害、そしゃく・嚥下障害のリハビリテーションに関する研究を支援します。

## 視覚機能学

眼球運動、視空間認知、視覚情報という視覚機能を基本として視覚に関連した研究を行う領域となります。視覚機能士の方、視覚検査やリハビリテーションに興味がある方の研究を支援します。

## 【博士前期課程】

## 論文コース 医療技術分野

## 臨床検査学

臨床検査は医療を行う上で欠かせない領域の一つです。診療、看護、他の検査、治療を実施する上でも患者の状態を客観的に判断できる方法です。基礎教育でも多くの検査や疾患を学んでいますが、検査結果を深く正しく読み込むためには検査の原理を正しく理解する必要があります。また、新規の検査も出現し新たな知見も発見されています。臨床検査学は検査の意味を理解し判断するための知識を学び、研究する領域です。

## 診療放射線学

放射線に関する撮影技術、検査技術、放射線治療技術、放射線測定技術、放射線管理技術などについて研究を行っています。また、チーム医療やスタッフ教育に関する教育、研究、医療人として、また組織人の育成も行っています。診療放射線学技術の最新知見、医療従事者の教育指導法を学修、研究することによって、放射線診断領域や医療現場でリーダーシップを発揮する能力を持つ診療放射線技師ならびに医療従事者を育成します。

## 臨床工学

臨床工学領域の基礎学力および人工呼吸・体外循環・血液透析などの各分野における専門知識を幅広く学修するとともに、最新の医療機器についての理解を深めることによって専門知識と広い学識を修得し、医療現場でのリーダーならびに教育者を育成します。また、機器管理の実務的専門家として、医療安全工学の観点から医療現場での事故防止や医療機器開発に関連する研究を行うこともできます。

## 口腔保健学

口腔保健学では口腔から全身の健康を支援し、生活の質を高める取り組みや効果的な口腔健康管理システムの開発・研究を行っています。妊娠期からのすべてのライフステージにおいて口腔健康管理を行いながら口腔機能の維持・向上に向けた力を発揮できる人材の育成に取り組めます。口腔保健の専門的立場から幅広い他の領域や分野とも連携を図り、国民の健康寿命延伸に寄与するための基盤をつくることを目的としています。

## 専門コース 専門看護師(CNS)分野

## 老年看護学

高度実践看護師課程(38単位)として、複雑で解決困難な看護問題を持つ個人、家族及び集団に対して水準の高い看護ケアを効率よく提供できる高度な看護実践能力を育成します。急性期病院から在宅という幅広い視野で、高齢者の健康の回復や増進を支える卓越した看護実践能力を身につけます。老年看護に興味があり、高度な実践能力を身につけたいと考えている看護師(実務経験5年そのうち3年は専門分野で実践が必要です)。

## 精神保健看護学

精神保健上の問題を抱え、地域で治療やリハビリテーションを受けている対象や療養中の対象への高度なケアを提供できる。また社会の人々の精神的な健康を守ることで社会に貢献できる精神看護専門看護師の育成を目指します。精神科救急医療はもとより、地域における多様な精神保健看護分野への要請に対応でき、そして精神看護専門看護師の役割や機能、社会的な価値について実績を示して説明できる専門看護師を養成します。

## がん看護学

本学の強みである最先端のがん医療とそれを支えるチーム医療を講義・実践・研究を通して学びます。ケアとケアを統合してがんを持つ人を全人的に支え、がん患者とその家族のQOLを高めるためのエビデンスに基づいた卓越したがん看護実践能力を身につけます。高度実践看護師課程(38単位)として認定をうけ、がん看護専門看護師の育成を目的とします。

## 専門コース 遺伝カウンセリング分野

## 遺伝カウンセリング学

認定遺伝カウンセラーは、最新の遺伝医学の知識を持ち、遺伝医療を必要としている患者や家族に、適切な遺伝情報や社会の支援体制等のさまざまな情報提供を行い、心理的・社会的サポートを通して、当事者の自律的な意思決定を支援する保健医療専門職です。本コースは、認定遺伝カウンセラー制度による遺伝カウンセラー教育課程として認定されており、単位取得することで認定試験の受験資格を得ることができます。

## 専門コース 医学物理教育分野

## 医学物理学

医学物理学とは、物理学の知識・成果を医学・医療に活用・応用することを目的とする学問です。本分野は、放射線医学における物理的および技術的課題の解決に先導的役割を担う者として、放射線を用いた医療が適切に実施されるように、医学物理の専門家である医学物理士の育成を目指しています。対象は、理工学系・放射線技術系学士の学位を有している方です。本邦では医学物理士の数が圧倒的に不足しており、今後ますます発展が期待される領域です。

## 専門コース アスレティックトレーニング分野

## アスレティックトレーニング学

アスレティックトレーニング学とは、スポーツを行う者に対するスポーツ傷害の予防とケア、パフォーマンス向上を目的に、学際的な研究成果とスポーツ現場での実践を融合させる応用科学です。本コースでは、スポーツ現場での実習を通じて実践研究を具現化できる人材を育成します。また、日本スポーツ協会によるアスレティックトレーナー(JSPO-AT)免除適応コースとして承認されており、単位取得することで認定試験の受験資格を得ることができます。

## 【博士後期課程】

## 論文コース

## 医系基礎・専門・教育分野

前期課程の「医系基礎・専門・教育領域」の各領域で行われた研究内容をさらに発展させ、新知見を探索、発見する研究を行います。基礎・臨床に関わる実験・観察系の研究だけでなく、マネジメントや教育に関する応用研究も含まれ、多様な研究方法を用います。ヒトを対象とする研究だけでなく、動物実験による研究も行っています。得られた研究成果は広く全世界に発信します。職種や有する資格(免許など)は問いません。

## 看護分野

保健医療学の中の看護学の学問体系において研究を行います。社会の要請に応えるべく高度な看護実践や看護管理の科学的根拠となる研究を行います。博士前期課程の看護分野とつながりを持ち、さらに高度で独創的な研究へと進めます。学問の発展に寄与する研究成果は世界に発信します。保健医療学のリーダーとなる教育者、研究者を輩出します。看護師、保健師、助産師、看護学に興味のある方(博士前期課程(修士課程)を修了していることが必要です)。

## リハビリテーション分野

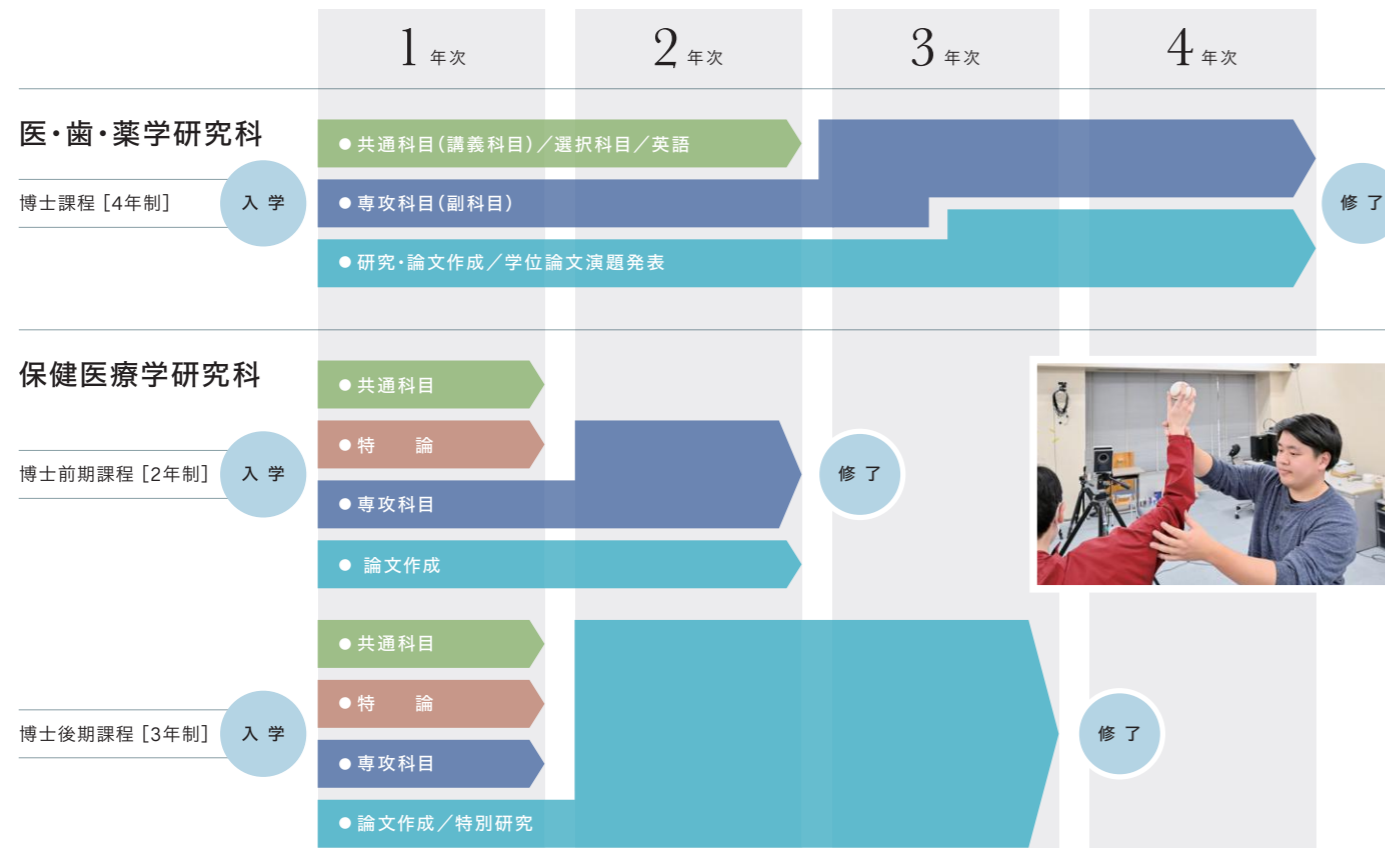
リハビリテーション分野は、中枢神経障害や呼吸器・循環器・代謝系障害、運動器障害や精神保健上の問題など多岐に渡ります。博士後期課程では、博士前期課程におけるこれらの部門で培われた知識を基に、より先進的な研究に取り組み基礎研究だけでなく臨床研究を活性化していきます。さらに、研究責任者として研究の企画・実践ができるだけでなく、後進の指導や論文の査読ができる段階に到達できるような能力を養います。


## 医療技術分野

医療技術分野は、診療放射線学、医学物理学における基礎知識、専門知識を学修するとともに、最新の知見や理解を深め、幅広い学識を修得し、医療現場でのリーダーならびに教育者を育成します。また、各領域の専門家として、医療安全も含めた医療現場での中心的人材を育成し、さらに、研究責任者として研究の企画・実践ができ、加えて後進の指導や論文の査読ができる人材を育成します。



# カリキュラム





<b>共通科目</b>	大学院での研究を開始するにあたり、研究の進め方、科学論文の読み方、実践の基礎および実験結果の統計的処理方法など、研究者に共通の知識・技術について学びます。全研究科の在籍者が受講できます。	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 生体の組織構造解析法</li> <li>◎ 分子生命科学的解析法</li> <li>◎ 生体の病理病態学的解析法</li> <li>◎ 医学生物における統計学的解析法</li> <li>◎ 生体の機能解析法</li> <li>◎ 研究倫理・教育・AI</li> <li>◎ 生体内の物質分析法</li> </ul>
<b>専攻科目 (副科目)</b>	共通科目で基礎教養を修得したのち、専攻科目で専門分野について深く学びます。実習・演習を主とし、論文抄読等も含め、指導教員による少人数制指導が行われます。	
<b>学位論文 演題発表</b>	学位論文は、研究科主催の発表会または学内学会である昭和医科大学学士会で全員が演題発表を行います。	

**4大学院連携 がんチーム医療**

各大学の特色あるがん医療を学び、さまざまな場面で貢献できる人材を養成

がん治療は、多職種が連携して患者さんを支えるチーム医療の代表的な分野です。大学病院での先端医療から在宅での緩和医療まで、その範囲も広く、チーム医療の組み合わせや目的も多岐にわたります。こうした背景から、さまざまな場面で貢献できる力を養うため、2014年度から東京慈恵会医科大学、星薬科大学、上智大学と連携し、4大学院共通科目「がんチーム医療」を開講しています。各大学の特色あるがん医療の授業を受講するとともに、多職種の大学院生がグループで最適な治療やケアを討議・提案する、ワークショップを開催しています。





# 共同研究施設

昭和医科大学では各学部・研究科等に共通する研究の充実のために、5つの共同研究施設があります。

- 遺伝子組換え実験室
1

動物実験による遺伝子組換え実験室。微生物や動物細胞を用いた遺伝子組換えを行う実験や遺伝子組換え動物の飼育・繁殖、実験を行う施設の管理と運営を行っています。本学研究者が登録をして利用できます。
- 電子顕微鏡室
2

透過電子顕微鏡、走査電子顕微鏡、共焦点レーザー顕微鏡などを用いた、超微細構造形態や3次元解析などの研究・教育を行うバイオイメージングの共同施設です。本学教職員、大学院生、研究生等は指定の講習を受けることにより利用できます。
- 分子分析センター
3

質量分析、核磁気共鳴装置など、共用性の高い機器分析装置を維持管理する共同施設です。装置操作の技術指導や、装置メーカー担当者等を招いたセミナー講習会を教員・学生へ随時行っています。本学学部学生や大学院生、教員、学外共同研究者が利用できます。依頼測定にも応じています。
- 動物実験施設
4

実験動物を適正に飼養・保管し、動物実験等を適正かつ安全に遂行するための施設です。
- 臨床医学共同研究室
5


主に医学部の臨床系講座が利用している研究室です。デジタルPCRシステム、マルチプレックスアッセイシステム、DNAシーケンサー、リアルタイムPCR解析システム、フローサイトメトリーシステムなどの様々な研究機器のほか、組織染色実験や細胞培養実験などの設備を設置しており、機器の使用説明会やセミナーなども行っています。



## 昭和医科大学統括研究推進センター

SURAC

センター長 三邊 武彦



**大学院在学中も卒業後も、研究に関する様々な支援が受けられます。**

昭和医科大学統括研究推進センター(SURAC)は、本学の研究基盤を支える組織として、大学院生も含め本学で研究に取り組むすべての研究者を対象に、教育から研究相談、倫理審査、資金獲得、知的財産管理まで、研究活動の各段階をワンストップで支援しています。「臨床現場の疑問を形にしたい」という情熱を確かな成果へと導くため、統計解析の専門的

なアドバイスや論文作成支援を充実させ、多忙な臨床業務とハイレベルな研究を無理なく両立できる環境を整えています。倫理審査の手続きから論文投稿に至るまで、研究の過程で生じるさまざまな悩みや課題に、各分野の専門家が寄り添いながら支援します。まずはお気軽にご相談ください。

# 最先端の研究を支える研究所

本学の11研究所では、医系総合大学としての特色を生かし、4学部および附属病院の臨床と連携した学際的研究を推進しています。その成果は、新たな治療法の確立や新薬開発への礎となり、医学の発展に大きく貢献しています。



## 富士山麓自然・生物研究所 ◆所長 平井 康昭

The Mt. Fuji Institute For Nature and Biology

富士山麓自然・生物研究所は、富士山麓の自然環境と生態系の保全に寄与することを目的として2022年5月に開所しました。標高3776mの活火山である富士山の裾野には、富士五湖を含む水域や、人為的な影響が大きい伐採地から国立公園までを含む陸域が存在します。2013年に世界文化遺産に登録され、山麓

地域を包含した保全の取り組みがより一層求められています。今後は自然環境と生態系の調査・研究に加えて学生への教育普及活動にも取り組み、さらに地方自治体が行う自然環境調査や市町村史編纂に協同して、富士山麓の保全に貢献しようと考えています。

## 臨床薬理研究所 ◆所長 小林 真一

Clinical Research Institute for Clinical Pharmacology & Therapeutics

本研究所は、2011年に昭和医科大学烏山病院内に設立された研究専用ベッド44床を有する研究施設で、早期探索的治験や臨床研究を実施しています。

2020年4月に臨床免疫腫瘍学部門、翌年4月に臨床腫瘍診断学部門が設置され、がん免疫療法に係る先端的研究を推進し

ています。さらに9月には薬学部臨床薬学講座臨床研究開発学部門が設置され、薬学的発想に基づく臨床研究も実施しています。臨床薬理研究所は、昭和医科大学の各附属病院や各学部の講座、また他大学機関とも共同で臨床研究を実施し、多くの成果をあげています。

## 脳機能解析・デジタル医学研究所 ◆所長 佐藤 洋輔

Brain Function Analysis & Digital Medicine Research Institute

2018年に昭和医科大学は日本てんかん学会研修施設に認定され、安全確実なてんかん診療の実践と、特殊脳波解析技術を活用した脳機能研究に精力的に取り組んでいます。

また近年は、生体シグナルや医用映像などの様々な情報がデジタル化され、適切なソフトウェアやAI技術を活用することで、

新たな知見や発明がもたらされる可能性が高まっています。脳機能解析・デジタル医学研究所は、革新的かつ臨床直結型の脳機能解析研究および技術開発と、医学・医療における先進的なDx化を目的として、2023年4月に設置されました。

## 先端がん治療研究所 ◆所長 鶴谷 純司

Advanced Cancer Translational Research Institute

先端がん治療研究所は、基礎研究や臨床研究を通じてがんの診断・治療・予防技術の開発を推進します。細胞株や動物モデルを用いた基礎研究の経験や、また血液や腫瘍検体を用いたトランスレーショナルリサーチのための基礎知識を学びます。

さらに、2022年3月には昭和医科大学病院内に先端がん治療

研究臨床センターが設置され、治験、特定臨床研究、医学研究を経験することが可能です。基礎と臨床を融合したがんのトランスレーショナルリサーチのトレーニングを通して、研究者を目指してみませんか。

## ストレスマネジメント研究所 ◆所長 中尾 睦宏

Institute of Stress Management

2023年に昭和医科大学旗の台キャンパスに開設された研究所です。常勤スタッフは3名、研究室は2つと人員・設備は限られているので、オンラインを活用してストレスマネジメント・プログラムと一般心理カウンセリングの社会実装を当面の課題としています。研究面では、健康な方や未病の段階の方を

対象としたストレスマネジメント・プログラムのランダム化比較試験を実施しました。教育面では、医学部の行動医学、他学部では行動科学を担当しています。以上、産・官・学の連携を目指して活動をしています。

## スポーツ運動科学研究所 ◆所長 加賀谷 善教

Research Institute for Sport and Exercise Sciences

スポーツ健康科学分野の発展に寄与すべく、2015年4月に昭和医科大学藤が丘リハビリテーション病院内に設立されました。トップアスリートから運動愛好家までの運動器・内科・歯科・栄養に関する障害予防や疾病治療などを大きなテーマにしています。そして、リハビリ病院を中心に他の附属病院・各学部と連携し、

それぞれの診療科・学部研究室のテーマを横断的に融合させた学際的な研究を行っています。また、学生教育や地域健康増進活動にも取り組んでいき、スポーツ医科学・健康科学を通して人間の可能性を探求する研究所を目指しています。

## 臨床疫学研究所 ◆所長 長谷川 毅

Institute of Clinical Epidemiology

臨床疫学は臨床医学におけるクリニカル・クエスチョンを疫学的な手法を用いて解決しようとするEvidence based medicine (EBM)の根幹を成す実践的な学問領域です。医学部だけでなく歯学部、薬学部、保健医療学部を有する医系総合大学である本学の多職種連携の特色を活かした、他にはない学部横断的な

臨床疫学の研究・教育拠点として、2024年4月に臨床疫学研究所が設置されました。臨床疫学研究を通じて、本学の学術的評価の向上を図るとともに、建学の精神に沿う「実地に役立つ」より良い医療人の育成に貢献することを目指しています。

## 発達障害医療研究所 ◆所長 太田 晴久

Medical Institute of Developmental Disabilities Research

本研究所は2013年に昭和医科大学烏山病院内に設立されました。烏山病院では2007年から成人発達障害の専門外来を行っており、国内でも最大級の診療実績があります。成人期の発達障害を主な対象として、質問紙調査からデイケアプログラムの開発、最新の脳神経科学研究に至るまで、発達障害に関する幅広い

臨床研究を実施しています。脳神経科学の分野では、最新の3 Tesla MRI装置を導入して、発達障害の脳画像研究を推進しています。MRI以外にも、視線計測装置や脳波計、経頭蓋磁気刺激(TMS)装置など、最新の知見と技術を駆使した研究に取り組んでいます。

## メディカルデザイン研究所 ◆所長 安次富 隆

Institute of Medical Design

メディカルデザイン研究所は、多摩美術大学との包括連携協定のもと、医療分野におけるデザイン研究を通して、患者さんや医療従事者のQOLの向上に寄与するため、2024年4月に横浜キャンパスに設置されました。

当研究所は、世界に例のない医術と美術(デザイン)の連携による医療現場全体のQOLを向上させる手法を切り拓くことを目指しています。

## 臨床ゲノム研究所

Institute for Clinical Genetics and Genomics

臨床ゲノム研究所は、ゲノム医療を昭和医科大学が一丸となって推進していくという旗頭を掲げて、2022年4月に設立されました。まず、医療職の方には、がんゲノム医療を理解し、臨床での実践に役立つようなe-learningソフトを作成しました。また、患者さんを含む一般の方向けのソフトも作成しました。各附属

病院で行われているがんゲノム検査の結果とその関連の医療情報を一元管理できるデータベースを開発し、今後様々な目的で利用できるよう整備していきます。今後は、がん既発症者のみならず、未発症者のゲノム情報がいかに健康管理に役立てられるかについても研究してゆきます。

## 細胞外マトリックス研究所 ◆所長 金山 朱里

Institute for Extracellular Matrix Research

細胞外マトリックス研究所は2024年4月に昭和医科大学の11番目の研究所として旗の台キャンパス内に設立されました。生体の構造と機能を支える「生命の足場」である細胞外マトリックスに関する研究を主軸としています。現在は特に線維化関連疾患に焦点を当て、細胞外マトリックスの過剰蓄積メカニズムの解明

と、線維化関連疾患の治療法開発に取り組んでいます。また研究成果の社会実装を目指し、産学官連携を積極的に推進しています。これらの取り組みを通じて、当研究所で開発された新技術を効果的に社会に還元し、医療の進歩に貢献することを目指しています。

# 大学院データ

## 在学生数

(2026年4月1日現在)

研究科名称		入学定員	収容定員	募集定員	在学生数
大学院	医学研究科	60	240	60	300
	歯学研究科	22	88	22	116
	薬学研究科	15	60	15	101
	保健医療学研究科(博士前期課程)	20	40	20	48
	保健医療学研究科(博士後期課程)	6	18	6	17
合計		123	446	123	582

## 入学試験結果

(2026年4月1日現在)

区分		志願者			入学者数			入学者の出身大学等				
		男	女	計	男	女	計	本学から進学	他大学から進学	それ以外		
医学研究科	2025年度 秋季	一般	5	0	5	5	0	5	0	5	0	
		社会人	12	3	15	12	3	15	6	9	0	
		合計	17	3	20	17	3	20	6	14	0	
	2026年度 春季	I期一般	1	1	2	1	1	2	1	1	0	
		I期社会人	10	5	15	9	5	14	12	2	0	
		II期一般	5	1	6	5	1	6	0	6	0	
		II期社会人	15	5	20	15	5	20	15	5	0	
	合計	31	12	43	30	12	42	28	14	0		
	歯学研究科	2025年度 秋季	一般	2	2	4	2	2	4	3	1	0
			社会人	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計			2	2	4	2	2	4	3	1	0	
2026年度 春季		I期一般	6	1	7	6	1	7	4	3	0	
		I期社会人	0	1	1	0	1	1	0	1	0	
		II期一般	8	14	22	8	13	21	15	6	0	
		II期社会人	0	1	1	0	1	1	1	0	0	
合計		14	17	31	14	16	30	20	10	0		
薬学研究科		2025年度 秋季	一般	1	0	1	0	0	0	0	0	0
			社会人	2	1	3	2	1	3	0	3	0
	合計		3	1	4	2	1	3	0	3	0	
	2026年度 春季	I期一般	3	0	3	3	0	3	3	0	0	
		I期社会人	4	8	12	4	6	10	8	2	0	
		II期一般	1	0	1	0	0	0	0	0	0	
		II期社会人	1	4	5	1	4	5	2	3	0	
	合計	9	12	21	8	10	18	13	5	0		

区分		志願者			入学者数			入学者の出身大学等			
		男	女	計	男	女	計	本学から進学	他大学から進学	それ以外	
保健医療学研究科	2025年度 秋季	博士前期課程 一般	0	1	1	0	1	1	0	1	0
		博士前期課程 社会人	5	5	10	3	3	6	3	3	0
		合計	5	6	11	3	4	7	3	4	0
	博士後期課程	一般	0	1	0	0	1	1	0	1	0
		社会人	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		合計	0	1	0	0	1	1	0	1	0
合計	5	7	11	3	5	8	3	5	0		
2026年度 春季	博士前期課程 ※	一般	2	6	8	2	4	6	3	3	0
		社会人	10	7	17	6	4	10	4	4	2
		合計	12	13	25	8	8	16	7	7	2
	博士後期課程	一般	1	0	1	0	0	0	0	0	0
		社会人	2	2	4	2	1	3	3	0	0
		合計	3	2	5	2	1	3	3	0	0
合計	15	15	30	10	9	19	10	7	2		

※専門コースを含む

### 2025年度秋季合計 [4研究科]

区分	志願者			入学者数			入学者の出身大学等		
	男	女	計	男	女	計	本学から進学	他大学から進学	それ以外
合計	27	13	39	24	11	35	12	23	0

### 2026年度春季合計 [4研究科]

区分	志願者			入学者数			入学者の出身大学等		
	男	女	計	男	女	計	本学から進学	他大学から進学	それ以外
合計	69	56	125	62	47	109	71	36	2

## 修了者数

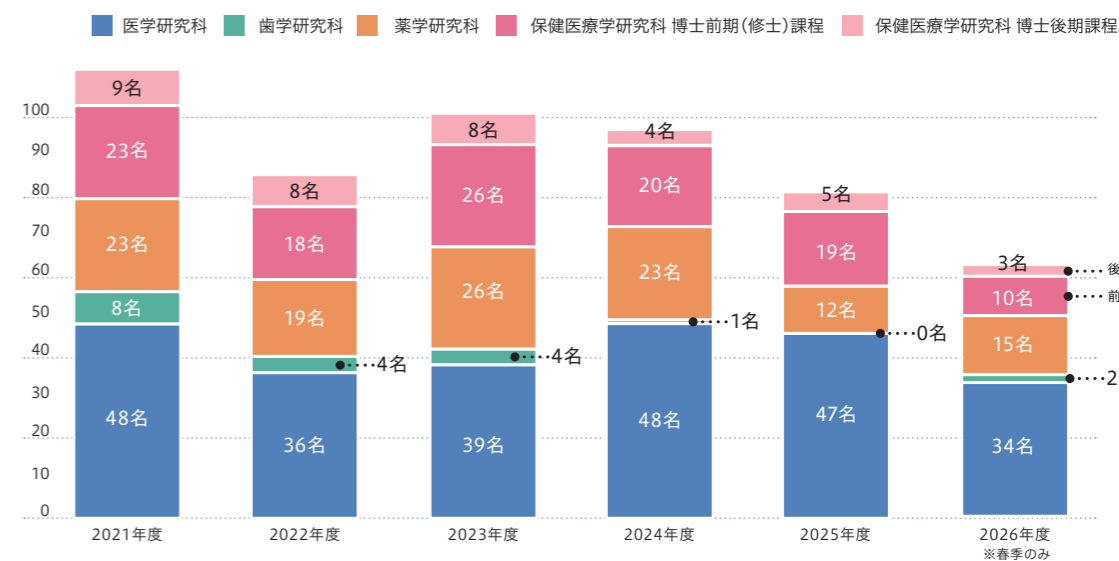
(2026年3月31日現在)

区分	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度
医学研究科(博士)	45	53	43	40	34	46	41
歯学研究科(博士)	21	22	19	22	25	26	25
薬学研究科(博士)	15	13	17	13	18	17	19
保健医療学研究科(博士前期課程)	20	20	17	16	15	15	25
保健医療学研究科(博士後期課程)	1	5	5	5	9	10	4

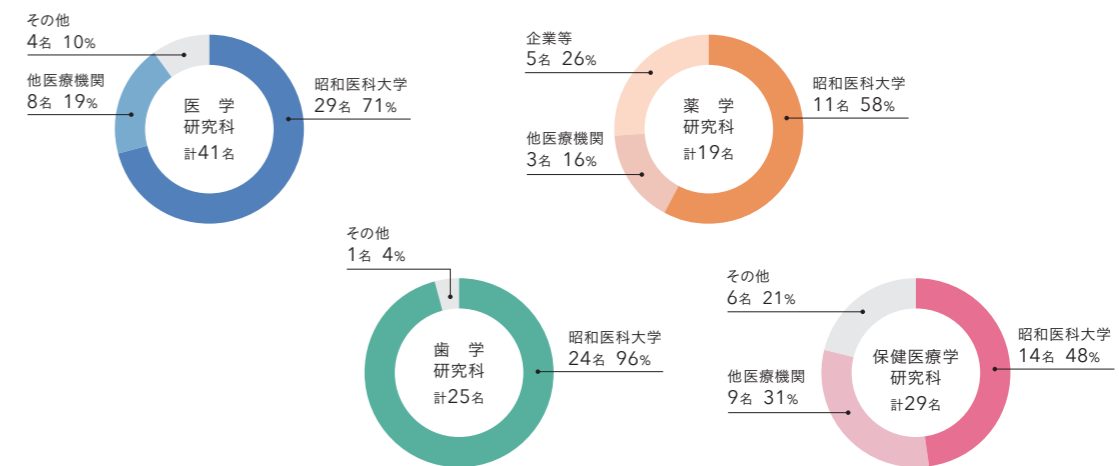
※保健医療学研究科(博士前期課程)には、CNS修了者を含む

## 社会人の受入実績

(2026年4月1日現在)



## 2025年度 修了者進路状況



## 早期修了制度

下記の年数以上在籍していれば、優秀な業績をあげた学生に限り、特例により在学期間の短縮が認められています。

- ◎ 博士課程 3年
- ◎ 博士前期課程 1年
- ◎ 博士後期課程 修士課程もしくは博士前期課程に2年以上在籍し、当該課程を修了した者 1年
- ◎ 修士課程に1年以上在籍し、当該課程を修了した者 修士課程における在籍期間を含めて3年

## 表彰制度

### 【上條賞】

在学中に特に優れた業績をあげた学生に対して、上條賞が授与されます。

## 大学院生海外渡航奨学金制度

昭和医科大学では大学院各研究科の在学生が海外に渡航し学会発表等を行う場合に、申請により奨学金を支給する制度をもうけています。在学中1回で、10万円を限度とします。なお、この奨学金の対象は筆頭演者として研究発表する場合(渡航期間5日間以上)に限られます。

## 科目等履修生制度 (MDプログラム)

科目等履修生制度 (Multi Doctorプログラム) は、次世代の研究者を育成するために、本学の学部在学生在が科目等履修生として大学院の教育を受け、研究マインドを醸成するものです。医学部、歯学部、薬学部の第2学年以上を対象とし、大学院の専門的な科目を受講する十分な学力があると認められた学生が、医学研究科、歯学研究科、薬学研究科のひとつを選択して修学できます。学部卒業後、決められた期間に大学院に入学した場合、科目等履修生として修得した単位は、修了必要単位として算入することができ、早期から論文作成に向けて研究に集中することができます。

奨学金制度

◆昭和医科大学独自の奨学金制度

名称	制度の内容	給付/貸与	対象研究科	対象者	給付額/貸与額	給付期間
昭和医科大学大学院奨学金	昭和医科大学大学院奨学金給付制度は、学生が経済的理由により大学院に進学できないことや、研究を断念することがないよう、また、優秀な学生に対して学業を奨励し、本学全体の学術研究の質的レベルの向上を図るために設けられた奨学金給付制度(返還義務のない奨学金)です。 ※学費納付後に給付されます。	給付	全研究科	日本に生活基盤を有さない外国籍の学生で、本奨学金以外の奨学金の給付を受けていない者	1年次 60万円/年 2年次～4年次 50万円/年	標準 修業 年限
			医学研究科 歯学研究科 薬学研究科	学部5・6年次に本学学部特別奨学金の給付を受けていた者	1年次～4年次 40万円/年	
			薬学研究科	臨床薬剤師研修を行い、大学院修了後、4年以上本学において、教育・研究・臨床に従事する者	1年次～4年次 40万円/年	
大学院特別奨学金	大学院特別奨学金は、特別奨学生が経済的理由により、大学院進学を断念することがないよう、また、学業に専念できるよう設けられた奨学金給付制度です。 ※学費納付後に給付されます。	給付	薬学研究科	学部5・6年次に本学学部特別奨学金の給付を受けていた者	1年次～4年次 120万円/年 ただし、臨床研修薬剤師期間を除く	
学校法人昭和医科大学奨学金	学校法人昭和医科大学奨学金は、修学が困難な学生に貸与し、優秀な人材を育成するために設けられた貸与型の奨学金です。	貸与	全研究科	一般枠の学生で、日本学生支援機構による奨学金の採用をされなかった者	50万円/年	1年間

※他の奨学金給付制度(返還義務のない奨学金)との併用はできません。  
※奨学金制度については変更になる場合があるため、最新の情報はホームページ、入試要項等をご覧ください。

◆昭和医科大学以外の奨学金制度

名称	制度の内容	給付/貸与	対象研究科	対象者	給付額/貸与額	給付期間
岩垂育英会	岩垂育英会は、生命科学、特に、歯科基礎医学を研究する大学院生で、学術優秀でありながら経済的理由によって、修学が困難なものに対して奨学援助を行うことにより、将来有用な歯科基礎医学研究者の人材を育成することを目的としています。	給付	歯学研究科	歯学研究科に在籍する学生	5万円/月	1年間
森田奨学育英会	森田奨学育英会は、学術優秀、品行方正、身体強健でありながら、経済的理由により修学が困難な者に対し、奨学援助を行い、もって社会有能の人材を育成すること並びに歯科医学医術向上のため奨学事業を行うことを目的としています。	給付	歯学研究科	歯学研究科の4年生	3万円/月	1年間
日本学生支援機構	日本学生支援機構は、経済的理由により修学に困難がある優れた学生に対し、奨学金を貸与しています。	貸与	全研究科	全大学院生	5万円～15万円/月	標準 修業 年限

※日本学生支援機構については業績優秀者返還免除制度があります。(無利子貸与奨学金のみ)

学 費

	入学金	授業料(年額)	実習費(年額)	施設費	合計
医学研究科	100,000円	400,000円	100,000円	300,000円	900,000円
歯学研究科	100,000円	400,000円	100,000円	300,000円	900,000円
薬学研究科	100,000円	400,000円	100,000円	100,000円	700,000円
保健医療学研究科 (博士前期課程)	100,000円	400,000円	100,000円	100,000円	700,000円
保健医療学研究科 (博士後期課程)	100,000円	400,000円	100,000円	100,000円	700,000円

※入学金と施設費は、初年度のみ納付 ※施設費は、本学出身者は免除

医学研究科



入学時期	春季：4月/秋季：10月
入試時期	春季Ⅰ期・秋季：8月/春季Ⅱ期：2月
募集人員	春季Ⅰ期：一般・社会人各30名/春季Ⅱ期・秋季：一般・社会人各若干名
選抜方法	外国語試験(英語)および志望専門科目(口頭試問等)

歯学研究科



入学時期	春季：4月/秋季：10月
入試時期	春季Ⅰ期・秋季：8月/春季Ⅱ期：2月
募集人員	春季Ⅰ期：一般22名・社会人若干名/春季Ⅱ期・秋季：一般・社会人各若干名
選抜方法	外国語試験(英語)および志望専門科目(口頭試問等)

薬学研究科



入学時期	春季：4月/秋季：10月
入試時期	春季Ⅰ期・秋季：8月/春季Ⅱ期：2月
募集人員	春季Ⅰ期：一般・社会人15名/春季Ⅱ期・秋季：一般・社会人各若干名
選抜方法	外国語試験(英語)および志望専門科目(口頭試問等)

保健医療学研究科



入学時期	春季：4月/秋季：10月
入試時期	春季：11月/秋季：8月
募集人員	春季：前期20名・後期6名/秋季：前・後期ともに若干名
選抜方法	前期：英語・小論文および面接/後期：英語および志望専門科目

●昭和医科大学大学院についての問い合わせはこちらまで

学事部大学院課 [医学研究科・歯学研究科・薬学研究科]

〒142-8777 東京都品川区旗の台1-9-14 TEL:03-3784-8793  
Mail:daigakuin@ofc.showa-u.ac.jp

学事部長津田校舎事務課 [保健医療学研究科]

〒226-8555 神奈川県横浜市緑区十日市場町1865 TEL:045-985-6503  
Mail:nrkyoumu@ofc.showa-u.ac.jp